蘆花日記

二

大正四年七月
——大正五年五月

筑摩書房

蘆花日記　二

昭和六十年八月三十日　初版第一刷発行

定価　四五〇〇円

著者　徳冨蘆花

監修者　中野好夫
横山春一

校注者　吉田正信

発行者　布川角左衛門

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一－九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六－四一二三
印刷　株式会社明和印刷
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致します

Printed in Japan　0095—11002—4604

目

次

大正四年七月一日　三
八月一日　二五
九月一日　四八
十月一日　九二
十一月一日　一二五
十二月一日　一八三
大正五年一月一日　二五三
二月一日　三一七
三月一日　三六八
四月一日　四〇九
五月一日　四七九
解題　五五五
注索引　五七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正四年（七月一日～十二月三十一日）

○七月一日　（木）　晴れる〔前月の二十九日より伊香保に来ている〕

越後の山にはまだ斑々の雪がある。鶯が鳴いて居る。セルの単衣に、襦袢、足袋、股引、袷羽織を重ねる。

細君の月病前に、小山〔覚子。順天堂医院からの付添看護婦〕の逗留中に、今日は榛名行の筈であつたが、昨夜々深しゝて疲れて居る上に、昨夜雨が降つたので、今日は見合はす。

お品叔母〔林品。妻愛子の母の妹〕から無事着の電報。

○七月二日　（金）　晴

秋の様な美晴。

六時出門。猿沢橋で記念の撮影。余は四人舁きの籐椅子にかけ、細君は同様の寝椅子に座り、小山は手代りつきの駕籠に二人の娘〔みの、きよ。お手伝いさん〕は脚絆に結付草履だ。

黄ろい木苺が熟して居る。甘い。

二ツ岳の小屋で一憩。それから上は明治卅三年以来十五年ぶりに来るのだが、植ゑた木が生長して折角の展望を礙げる。峠の茶屋で再憩。伊香保平はまだ花には早い。

九時、湖畔亭着。

三人を榛名登山させて、夫妻は寝ころんで憩ふ。緑の草山、碧瑠璃の鏡を□でた湖、風が硝子の外に颼々と冬の様な声して叫ぶ。

十一時に榛名組は帰つて来た。

鱒のアラヒ、及ヌタ、鯉こく、ギギユウ〔ぎぎ。淡水魚〕の蒲焼で昼めしを食ふ。

それから碁石拾ひなどして遊ぶ。

不図、湖水を舟で渡り、弁天滝へ廻つて帰る気になつたので、峠と二つ岳の茶屋の茶代を隣の客の駕籠屋に頼み、駕

籠は陸を廻らせ、一同舟で渡る。風も止んで、静かな水の上だ。シトロンで乾盃したり、水を飲んだり、〝空に囀る〟〔唱歌の「美しき天然」〕〝春は嬉しや〟〔流行唄の「四季の歌」〕を歌ふたり、二十分で舟は湖の出口近く着いて了ふた。

榛名は築山泉水式で、明るくて小さい。余の近頃の趣味には勿論物足らぬ。

此処から弁天滝までは約二里だ。あやめ、シモツケ、ホタルブクロ、オダマキなどが咲いて居る。山には唐桑の花が真白だ。余は栗の花、山紫陽位なもの。

一里ばかりは余も籐椅子を小山に譲つて歩いた。みの、きよもかはるがはる小山の駕籠に乗つた。

午后五時帰着。

梅雨中にはまだあるまじい好天気で、伊香保平から冨士が見えた。浅間も凄じく煙を吐いて居た。

金尾文淵堂〔出版社社主、金尾種次郎〕が面会を求めた。謝絶。明日逢はうと云はしたが、追かけてもう会はぬと云はす。

○七月三日　（土）　雨

好い日に昨日は榛名行をした。今日は早速雨だ。

郵便局の冨永が面会を求めた。謝絶。

游竜〔隆吉。「思出の記」以来の愛読者〕の馬鹿原稿を瞥見。彼が生立の悲劇を文字にしたのを見れば、今更にさびしい悲しい而して面白い人生である。唯相愛する外に悟るすべも世を渡る道もあるものではない。

金尾文淵が手紙と品物を使にもたしてよこした。手紙を留めて、物はかへす。

○七月四日　（日）　雨

新聞雑誌を読み散らしたり、トランプをしたり、碁石拾ひをしたり。

永井〔荷風〕後藤〔末雄。小説家、仏文学者〕共著の〝モウパツサン〟を細君に読んでもらひ、夕方終る。頭が痛くなつた。

○七月五日　（月）　雨

本野一郎〔駐露大使〕への添書を認め、関餘作〔関寛斎の三男〕に郵送。

少し風邪の気味、またのぼせ気味で、気分がわるい。

午后奮発して土倉の家まで散歩。碧色のウツホ草？　を摘み、帰路は電車道〔伊香保電気軌道。伊香保と渋川を結ぶ〕をあるいて帰る。

○七月六日　（火）　雨

雨森お釧サン〔妻愛子の女高師時代からの友人。女高師付属幼稚園の保母。小笠原伯爵家の家庭教師もしていた〕に長手紙を書く。

吾妻〔剛勝〕、小野〔震〕、菅野、大滝諸君〔順天堂医院の医師たち〕に礼状出す。

午后、細君を伴ひ、小山、みのを連れ、伊香保神社下まで上り、馬琴訳金瓶梅、涙香〔黒岩涙香。万朝報社主。翻訳家〕訳鉄仮面を借り、葛餅、煎豆など買ふて帰る。

書肆至誠堂から三宅さん〔雪嶺。評論家。政教社同人。政府の欧化主義に反対して日本主義を主張した〕の〝相痕〟〔評論集〕が送つて来た。

交合。

○七月七日　（水）　雨

髪を苅り、初めて大弓を引く。五十本に白的に六本中る。

午后、細君、小山、きよを伴ひ、八千代園を経て停車場まで運動。

宿から大福餅をくれた。

細君の〝鉄仮面〟を読むを聞く。間のぬけた探偵譚。

○七月八日　（木）　晴

細君、退院以来の日記を書く。

再度寄稿を求めて来た宮川経輝〔熊本バンドの一員。同志社の先輩。大阪基督教会牧師〕の大阪講壇〔月刊雑誌〕に、

〃お気の毒ながら
　書く事はイヤに御座候〃

と返事を出す。

榛名行以来六日目で珍らしく日光を見、山を見た。

午後、大弓引きに行く。細君、小山も来て、細君も引いたがまだ手が痛くてよした。小山が少し引いて、時計の鎖の一部を切つた。

須田逸平さん〔宿所千明仁泉亭の番頭格だった。主人千明三右衛門（三郎）の義弟〕が来た。髪が白くなつて居る。昨年入獄の顚末を聞く。獄中百首の詠草を預かる。団子と田舎饅頭を二苞くれた。

竹本柴吉と名のる東京の義太夫婆さんを呼んで、堀川〔近頃河原の達引〕の一節〕を語らす。

夜、上のはなれでは千両幟〔関取千両幟〕を語らせて居た。

小山の事で、細君気分を少しわるくした。

鉄仮面を聞く。

○七月九日　（金）　晴時々雨

細君同伴、大弓引きに行く。百本の内白中十三四に過ぎない。

林蔵〔塩田鉄五郎の三男。のち渡辺家へ養子。蘆花家の書生・農事手伝い〕から小包で胡瓜（きゅうり）、枇杷、グースベリーが送つて来た。

小山病臥。夕方、医者を迎える。腸カタルだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鉄仮面を聞く。
昨日聞いた女義太の妹を呼び、夢小屋を聞く。姉より下手だ。柳〔三十三間堂棟由来〕を愛想に追語りした。
過日の写真が出来て来た。先づよくうつつて居る。二ダース十二円だ。

○七月十日（土）微雨
須田サンの歌ではないが、此頃は毎日の〝カテに利根の川鮎〟だ。
朝餐の席で黒い着物は白面に似合ふことを云々して、細君の機嫌を損じる。あとで頬を嚙まれる。
夫婦で大弓引きに行く。
みのをやつて、郵貯から百円引出す。
小山も起きた。
午后、鉄仮面。夕方終る。間のぬけたもの。
須田サンから桜ン坊と鰺の干物をくれた。
金左〔鈴木金左衛門。千歳船橋の住人〕から甘藍二顆。みのの兄から礼状。
血書などをして弟子にしてくれと云ふ馬鹿がある。
夜みんなで遊ぶ。

○七月十一日（日）曇
細君、小山と大弓引きに行く。中らぬこと夥しい。細君も三本引いた。
午后、清を留守番にして皆出かける。八千代園に往く。大弓は上手が引いて居るし、楽焼には芸者らしいのを連れた紳士が居るし、そこそこに逃げ出す。西園寺の和尚はまだ来ないさうだ。彼梅の山路を下る。桑の実を採り、花を摘

みつゝ、昨秋腰かけて柿を食ふた山坡に休む。豌豆を畑に居た百姓から買ふ。馬頭観音の近くから帰る。蛇を一つ見る。下駄を右の方だけ踏み破る。留守の農家から縄きれをもらう。細君の発意で一銭置く。それから先生馬になり、細紐で細君の腕に結ひつけ、茶検場を経て帰る。紳士連あり見て笑ふ。

入浴してアイスクリームを食ふ。

夕めしに豆の飯。

夜、みの、きよ買物に行き、新しい初蕈と新林檎を一顆買ひ帰る。近々に水沢の方に蕈狩りに往かうと相談する。

交合。

●須田サンへ重箱をかへす、葛素麺をうつりに入れて。

●お釧さんから彼軽い西洋菓子が一缶届いた。以て返書に代ゆるのだらう。

●原田照子〔妻愛子の友人〕への長手紙につき苦情を□出。

○七月十二日　（月）　雨

大弓引き。

昨日の湯中子行で細君も余も大くたびれ。

帳場から琥珀糖をくれた。

細君一週間目で体量を測つたら五百六十目増した。小山は一貫目余減つた。

探偵小説〝決闘の果〟〔ボアゴベイ著、黒岩涙香訳〕を聞く。

夕方、食後、電灯をともさず語る。細君曰く、男はいつまでも男なれども、女はある時に達すれば女が已む、うちに子供があればあなたはそれで慰むが、子供が無いと本当にみぢめです、云々。而して生きて居ては本当に余の奥にはいれぬ、とやらのことを云ふ。死んで余の衷に入らうと云ふのだ。われ等に青春の純なる歓楽なかりしは、即ちその

遺憾を基礎として来生に復活する足がかりのやうなものだ、と余曰ふ。
上に子供の讃美歌聞こゆ。余曰く、単純な信仰に安きを求むるは容易なれど、余はヨリ苦しむ可くヨリ味はうべく命ぜらる、子供の信仰に安を偸むは天の父の叱りを受けるわけ也、余は余の十字架を負はざるべからず。

○七月十三日　（火）　晴　小雨来る
美晴に嗾かされ、初茸狩を思立ち、台所大混雑。
主人は先づ大弓引きはじめてから一週間の試験に出かける。百十本に十五本のアタリ、但第一箭と最終矢が中つたのは幸先がよかつた。
細君を例の四人舁きにのせ、一同、宿の長女のおいくさんも連れて徒歩で出かける。水沢の路は松杉が長じて、見晴らしは絶無になつた。観音の茶屋で饂飩を食ひ、筍を買ひ、一二三坊主や天狗俳諧〔各人が随意に詠んだ俳句の、上五、中七、下五を組み合わせて味わう遊戯〕をして遊ぶ。
帰路、松の絶間から少し平野を見る処で、持参の握飯、海苔巻を開き、サイダア瓶の茶をのむ。それから一同は茸を探がし、夫婦は寝ころんで話して楽む。鶯鳴き、山鳩鳴き、黄蝶飛び、薊や升麻（！）外二三の野花がふらふら頭を掉る。さる程雨がはらはらと来たが、間もなく止んで、春か小春の様な薄曇りになつた。
上の宿の連中も余等のあとから水沢に来て、余等より先きににこにこ笑ひながら側を通つて往つた。
茸は小籠に三ばいとれた。季節がまだ早いわりには獲物があつた。宿の番頭が雨傘をもつて迎えに来た。晴れて暑くなり、汗になつて四時過ぎ帰着。
●野村〔鈴助。出版社野村新橋堂主人〕から有平糖をよこした。宿に須田サンから伊勢撫子の鉢と、ダリヤの剪花をくれた。
●「決闘の果」を聞き終る。
●陽暦の盆の初日だ。飯後、縁の椅子にかけて、小山から病人臨終の話など聞く。

●三味線の音がしたので、例の女を呼び、逆櫓（ひらがな盛衰記三段目）を語らす。景物に朝貞日記（稗海亭柳浪著。「絵入文庫」）の一節。

○七月十四日　（水）　しば〳〵夕立　雷鳴

非常に暑い、蒸暑い。伊香保が斯様に暑くてはたまらぬと思ふ。午后、果然、夕立雷鳴。霽れては降り、降つては鳴り、三回までした。最後の夕方のは殊に劇しかつた。伊香保の雷を初めて経験した。

朝、弓引き、六十本に唯五本しか中らぬ。

昨日のくたびれで皆散々な成績。先生も無聊、無頼、伊香保がいやになり、小山がいやになり、自分がいやになる。ぢれて人をいぢめる。

盆の十四日で帳場から萩の餅、須田から餅をくれた。

涙香訳の探偵小説〝渠魁来〟（ボアゴベイ著）を聞く。

○七月十五日　（木）　晴

昨日の夕立でいくらか涼しい。

塩鉄（塩田鉄五郎。粕谷の住人）から南瓜二個、麦こがし二袋小包で送つて来た。一袋を帳場にやる。

村田勤（同志社で二年先輩。熊本英学校時代の同僚。明治中学校教頭）はがき。返事のはがき出す。

弓引き。

夕方、家をがらあきにして伊香保神社にのぼり、橋本亭に行きまづいアイスクリームを食ふ。提灯を借りて帰る。交合。

○七月十六日　（金）　夕方大雷雨

髯剃りに往つたが、盆でお休みだ。安全剃刀で自分やりかけたが、思はしくないので中止。
弓引き。少しは具合がよくなつた。
昨夜のつかれ、あつさ、腹□なんどで気がいらいら。それに懐が寒いので、大しよげ。
夕方、大雷雨。細君と男霊女霊の問題を論ずる。電は眼に痛く、雷は魂までも震はす。てつきり近くに落雷した時は、籐寝台の上で細君余にしがみついた。雷は Cleanser of Mine だ。吾儘(わがまま)をしてはおやぢに叱られる。おやぢの叱り声が今日は大分劇(はげ)しかつた。
電灯がつかないので、ランプや蠟燭で夜を照らす。
宿から白蚊帳を貸した。
辻占を夜買ふ。余のに曰く、心定まらず、性急にして禍を招き易し、運気は竜の天に騰るが如し。細君のに曰く、玉の石中にあるが如く、苦労多し、不動様を念ずれば可。

○七月十七日　(土)　晴　夕小雨
髯剃りに往つたら、十七日でまたお休みだ。それから八千代園に行き十二間の大弓場で五十本引き試む。たつた三本のあたり。
八千代園下の杉林に雷の落ちたあとを見る。昨日小山が見たのは此処の落雷だつたのだ。
探偵小説の〝死美人〟〔ボアゴベイ著、黒岩涙香訳〕を聞く。
東北理科大学生で試験に落第し文学に転ぜんとしてしばらく薫陶をうけたい云々と霜山経昭と云ふ青年。
柳香軒の弓引如例(れいのごとし)。
一昨日の橋本亭のアイスクリームの苦情を使の者に小山が云ふたら、お佗(ママ)〈詫〉びに今日三人前進物に持つて来た。
今の家が十九日限りと云ふことで、其後は直ぐ帰らうかと昨日みのに約束主の来日を帳場にきかしたら、帳場から今

日書生体の番本（小学教員で帳付ださうだ）をよこし、多分当月一ぱいは来られまい、来月は別館で十畳二室を都合するから、九月になつてまた此家に引越す様に、と云ふた。

夜、例の女義を呼び、御所桜弁慶上使〔「御所桜堀川夜討」の三段目〕を聞く。景物に仙台萩のさわり。

●碧梧桐〔河東碧梧桐。子規のあと虚子とともに俳壇の双璧〕の「日本人」に書いた登山記〔「白馬山登攀記」「大正二年九月～十月掲載〕を見、来月は細君と少なくも「上高地」へ往つて見やうと約束する。

○七月十八日（日）晴

細君、四十二回の誕辰だ。朝、赤飯を焚いて祝ふ。髯剃りに往つた路に枝豆を買ひ、うでさして食ふ。

外出を見合せ、しばしば氷をのみ、〝死美人〟を聞く。

引きに往く。

交合。

○七月十九日（月）晴

良八〔原田良八。妻愛子の兄〕が来て細君と喧嘩しぶちたゝく夢を朝方見てくたびれて寤める。

霜山経昭に〝試験管から筆へ〟の回転を賀し努力を祈る、但、来訪及文通を望まず〟と返事する。

引きに往く、二度にきりて。

〝死美人〟を聞き了り〝鬼耶人耶〟〔ガボリオ著、黒岩涙香訳〕を聞きはじめる。

夕方、帳場から水蜜桃をくれた。自園のだ。日時に来るべき客は廿五日に関西から帰京し、多分廿六日に伊香保へ来ると云ふ言伝があつたと知らした。それでは他の座敷に移ることを見合せ、廿四日若くは廿五日に帰ると明言する。伊香保が此頃はしつくり体に合ふて来たので、いよいよ帰るとなれば名残が惜まれる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com